



図2. ふれあいの森, 植物園の樹林と右端いのちの森の北半



図3. 下端 動物園上池, 下半 ふれあいの森の動物園樹林, 中程 いのちの森樹林, 上端 うるおいの森全域

1. 調査概要

(1) 調査地域

図1に示す所謂「ふれあいの森（動植物園）」「いのちの森」「うるおいの森」と西に接する名古屋大学構内の一部, 区域外の1か所植園公園.

(2) 調査期間と回数

- ア. 2018年5月21日から10月24日まで18回
- イ. 2019年3月26日から8月1日まで15回

(3) 各調査区域の状況

ア. ふれあいの森

区分上では名東区星が丘山手に所在する新池を含むが広小路線以北で実質的には平和公園と一体として扱われているので調査対象から削除した. この池は1950年代には全く人工的貯水池で一顧だにされなかった.

本区域は動植物園そのものである. 動物園施設, 遊園地施設と植物園施設以外は概ね常緑樹を主とした林で占

められる.

動物園内の水域では上池（ボート池）が最大で東部にはガマなどから成る抽水植物, 湿生草本帯を有し, 他は石組又はコンクリートの護岸. 水は清澄ではないし鯉が多い. 正門口には胡蝶池なる浅い人工池が道を挟んで広がり, ヨシ, ガガブタが優占するが秋期は水を抜き池底が露出する. 北園メダカ館前の林縁に暗い小流と水溜があるが秋季干上る.

植物園の水域では星が丘門東方のビオトープ東海の植物保存園地区所在の木道を有するビオトープ池（仮称）と休憩所を隔てたその上の小ビオトープ池（仮称）は全調査域内でトンボの棲息環境として最良である. 前者はフサモの一種, ヨシ, ガマ等が優占し, コウホネ等も見られる. 池畔の半分は湿生草本に富み周囲は開けている. 後者も小さい乍ら池畔は適度に草本, 木本に覆われる.



図4. 植物園 ビオトープ池



図5. 植物園 小ビオトープ池



図6. 植物園 四季のせせらぎ



図7. 動物園 上池



図8. 動物園 胡蝶池

いずれも自然的な低い土の岸である。奥地は昔から存在し、かつては低い土の岸の良好な汀であったが今は人工化され投入されたスイレンと鯉が増殖しており、本来の水草を欠く。也有園の辺りも昔の様なトンボの棲息場所

ではなくなった。上手の日本庭園の池も人工的である。道路脇林縁に緩流が存在するが、オオアオイトトンボの飛来以外は見ない。東南端稜線上のお花畠エリアに四季のせせらぎと称する人工コンクリート底の短い小流と浅い水場がある。（図4～8）

イ. いのちの森

東山公園線を隔てて動植物園南側に接し北方が高い丘陵地形である。東端の藤巻町3丁目、同2丁目は住宅地であるが、同1丁目以西は概ね常緑樹を主とした樹林である。

水系としては千種区天白町植田地内の名古屋高速緑橋換気所近くの林中の表流水水路終点にゴミで汚れた水溜りが存在する。藤巻町3丁目と接する区域東端の山香町に所在する新池は大きいが以前に比べ水位が上昇、岸は切り立ち樹木の鬱閉が進み現在では汀に近づけなくなった。水は汚濁し鯉が多く良くない。藤巻町2丁目南端の



図9. いのちの 森山香町新池



図10. 名東区植園町 植園公園の池



図11. うるおいの森「天白溪湿地」と称する所の双子葉湿生草本群落



図12. 同所 下端陸化域と側部細流

東山公園荒池ひろばは池は陸化し水路はコンクリート3面張りでトンボの棲息場所ではない。天白町植田東端林縁に存在する「金明水」と名付けられた湧水は極めて小規模のものでトンボの棲息地足り得ない。本区域の東北端に接する名東区植園町3丁目に所在する植園公園内の池を調査対象に入れている。池の構造周囲は比較的自然的であるが水は著しく汚濁している。この辺りはかつてベッコウトンボの多産地であった。

植物園門と動物園上池門のある交差点を南下した所にある駐車場とゴルフ練習場は池畔林縁に小池や湿地を伴う桜池という大きく良好なため池があった所を埋め立ててしまったものである。本誌2: 37-49参照。(図9～10)

ウ. うるおいの森

いのちの森南側と植田松和線で隔てられた最南端の公園区域。東に隣接し食い込んでいる天白区植田、同大坪

方面は全く市街地である。区域を南北に分断する自動車道山手植田線の北半の天白区天白町八事裏山は北西端に所在する東山公園テニスセンターを除いてほぼ全域が常緑樹を主とした樹林に覆われる。自動車道南半の天白区天白町八事山田は、グラウンド、霊園、住宅がかなりの面積を占め林は北半より少ない。

水系としては裏山の西稜線と中央稜線の間の谷斜面「天白溪湿地」と称する湿地状のところがある。ここは1960～1970年代にはハッチョウトンボ、シオヤトンボ等を産する良好な湿地があったが、その後丘陵上手から土砂が流入し一変したと聞いている。さらに樹木が伐採されたらしく今では谷下部は広い開放空間になっている。現状では一見谷戸の廃田湿地群の如く見え、多少の開水面はあるがミゾソバ、ドクダミ、セリ類を主とする双子葉の湿生草本に広く全体が覆われている。湿地と言うよりも谷斜面を流下する多量の表流水が拡幅した緩流



図13. うるおいの森 沢止め池



図14. 上端 沢止め池と防火貯水槽



図15. うるおいの森 天白溪下池公園の下池

部とでも称する様な感じである。澄明で豊富な水は常に存在し、当時は中央を流れていたと言う細流は両側を流下しているが右岸の湧水由来の方は短い。供給水の一部を担っているであろう谷上流の砂泥底細流は全く枯渇していることが多い。イネ科、カヤツリグサ科が優占する貧栄養の湧水に涵養される真の向陽裸地湧水湿地とは全く異質の水域である。下端は土砂が堆積し陸化しており、アキノウナギツカミ、ツルマメ、ヤマノイモ、ササガヤ、コヌカグサ等が生育する。

中央稜線の東側の谷には「沢止め池」と称する小池があり、上流の流れ由来の澄明な水であるが水生植物を全く欠き落葉底で枯木の水没も多い。アメリカザリガニのみが猖獗する。1970年代にあっては水生植物が生育し、ベニイトンボ、マルタンヤンマ、ネキトンボを産したと言うが何故か劣化したのかよく判らない。この池の下方にも小池が二つあるが状況は同様である。この谷は湧水に富み林道の一部にはかなり広く水溜りが生じ、オオシオカラトンボやリスアカネの飛来があるが、アメリカザリガニのみでヤゴの棲息を見ない。晩秋には著しく減水する。沢止め池から流下する流れがあるが、流量少なく貧弱である。

自動車道山手植田線以南の南半分では自動車道沿いの樹林帯の1ヶ所の林縁に「大坪湿地」と称する市がフェンスを施した草地があり、以前はモウセンゴケ類を始めとする湿地植物が生育する湿地と小開水面があったとのことであるが、現在では高茎イネ科、カヤツリグサ科草本が一面に繁茂し、向陽裸地湿地の存続は困難と見受けられた。立ち入れないので精査不能であるがトンボの姿

は全く見ない。又、この南半の南東部先端は、かつてヒメヒカゲの多産地として著名で各種トンボも産した「本当の天白溪湿地」であった所であるが、現在はその面影は全く消失し、人工の天白溪下池公園とフェンスを施された下池に成り下った。この下池は接近できないので詳細は不明であるが、水は汚濁し鯉が存在しゴミも浮遊する。ハスとオオフサモが優占する。（図11～15）

(4) 公園調査区域の現状環境の総括

東山動植物園とその南に広がる丘陵地帯は宅地化が進んだと雖も現在も常緑樹林は連続して、時に散在して豊富である。明るい落葉樹林は殆ど無い。図16、17は1950年代の植物園東端と旧愛知郡猪高村境の崖上、現



図16. 植物園東端稜線（現一万歩コース）のアカマツ林（1952.2.17撮影）



図17. 同所東斜面のアカマツ幼木群（同）

在の一万歩コース辺りの風景であるが、このようなアカマツが優占する状況は現在では見られない。

林内の所々に湧水の湧き出しと流れ道があるが、流水性トンボが棲息可能な程の規模の溪流の形成に至らない。動植物園内やその南方の丘陵区域には各々若干の池沼があるが、良好な汀や澄明で水生植物豊富な池沼性トンボの棲息に適する池は、植物園星が丘門近くのビオトープ池、小ビオトープ池以外には存在しない。尾張東部丘陵特有の本格的湧水湿地は見当らなかった。総じて現在の水系は流水、止水共貧弱である。（図16～17）

(5) 名古屋大学敷地

現在の東山公園区域の西方に位置する名古屋大学東部とその周辺は、かつては東山公園と一体の丘陵樹林、耕作地帯で水系にも恵まれていた。市電東山公園終点停留所から直接動植物園方面へ行かない場合は、手前の本山又は唐山停留所で下車し、やや南方へ下ってから東へ折

れ、現在の名大敷地東部とその周辺で採集し乍ら東山公園南西部に至った。今の名大敷地東部には当時の環境が若干そのまま残存している所がある。

今回は四谷通以東の北東部の農学部圃場と農学部前貯水池及び四谷通以西の南西端名古屋大学博物館野外観察園も調査範囲とした。

圃場はコンクリート三面張り水路で区画された何面かの水田とその端の林に接したウキクサが繁茂する貯水槽から成り、周囲は概ね樹林に囲まれその林の中にかつては向陽裸地湿地であったであろう湧水湿地の痕跡が残存する。農学部前の貯水池はヨシにかなりの部分が占められ、水は汚濁し鯉が多く良くない。四谷通以西敷地の西北部の広大な矩形コンクリート護岸の貯水池は、かつて遠浅開けた汀を有する広大で良好な溜め池鏡池の成れの果てである。

野外観察園は小樹林に囲まれ、その中の温室や草지가



図18. 名大農学部圃場



図19. 農学部前貯水池



図20. 名大博物館野外観察園



図21. ハッチョウトンボが育つ鉢とベニイトンボ定着人工池



図22. 鉢の植生

ある小空間に人口の浅い小池と直径数十cmの鉢が幾つか設置されており、前者にはベニイトトンボ、後者にはハッチョウトンボが定着している。関係者によるとこの地に名大施設が創設された当時からハッチョウトンボが居たとのことで、両種は往年の名古屋市東部丘陵産の末裔の可能性が高い。（図18～22）

2. トンボの現況

(1) イトトンボ類

ア. 越冬性イトトンボ3種のうち最も普遍的なホソミオツネイトンボ1種を植物園小ビオトープ池で少なからず見ただけであった。ビオトープ池は産卵に適する柔らかい茎の抽水植物を欠くのでこちらには居ない。時に下方の奥池東斜面湿地辺りに拡散している個体を見る。オツネイトンボは本種と共にかつては奥池で普通に見られたが今回は確認できなかった。ホソミイトトンボは2008年の市緑政土木局委託調査報告書のリストにも無く今回も見なかった。

イ. アオイトトンボ科ではオオアオイトトンボ1種のみがビオトープ池、小ビオトープ池に普通であった。他に未熟1♀だけうるおいの森林内で採集したがこれは飛来である。アオイトトンボは産卵に適する抽水植物が無いためか小ビオトープ池でさえも見られなかった。

ウ. Paracercion属イトトンボ各種は平地・低丘陵地ではどこでも衰退しクロイトトンボしか残存していないことが多い。当地域でも例外でなく本種のみがビオトープ池、小ビオトープ池に多産した。他にうるおいの森の水溜りで1♂のみ採集、動物園上池で1♂のみ目撃した

が飛来の可能性がある。

エ. キイトトンボ

植物園内小ビオトープ池、奥池東斜面湿地などに普通で、動物園北園メダカ館前の叢でも見られる。

オ. ベニイトトンボ

名古屋大学博物館野外観察園の浅い人工小池で毎年発生し続けている。1970年代には今では名大構内に取り込まれ人工貯水池と化したかつてのため池鏡池やうるおいの森の今の沢止め池に産した記録がある。観察園は1,500m隔たる星が丘山手所在の新池への供給源であった可能性も考えられる。

カ. アジアイトトンボ

最普通種の本種を植物園東端稜線上の人工水場四季のせせらぎで見ただけであったのは意外であり、当地域の自然度を考えさせられる。

キ. 天白溪下池公園所在の下池は周囲より凹んだ所にあり柵が施され立ち入れない。柵越しに双眼鏡で水面を探查してもイトトンボ類は発見されず勿論柵周囲に上昇拡散した個体もない。委託報告書にあるアオモンイトトンボやモノサシトンボの産地ではないかと思っていたがここでは一切イトトンボ類は認められなかった。現状では当調査地域は平地、低丘陵地の池沼の指標となるイトトンボ類は全く乏しい。

(2) カワトンボ科

調査地域の低丘陵地にはもともとアサヒナカワトンボが棲息する様な林内溪流は存在しない。より下流の湊流に棲息するニホンカワトンボも1950～1970年代迄には僅かに産したが他の多くの産地と同様絶滅している。

2019年7月10日ハグロトンボ1♂のみが千種区山手通西方の名古屋大学博物館野外観察園で同園吉野技官により撮影されているが、ここから西方へ市街地を直線距離で1,150m隔たる山崎川からの飛来と推定される。本種は委託調査報告書ではいのちの森で記録されているが、今回はうるおいの森旧天白溪上流水路や植田川でも見つからなかった。

(3) ヤンマ科

ア. 2018年マルタンヤンマの2羽化殻をビオトープ池で得たが、2019年には見なかった。

イ. ギンヤンマは動物園胡蝶池に多く、他でも普通である。クロスギンヤンマはビオトープ池と小ビオトー

ブ池から発生する。

ウ．サラサヤンマは適期に何度も行っているが全く見なかった。適する湿地、小水溜りが当地域内や近傍に存在しないことを示唆する。

エ．カトリヤンマは1950年代林内で無数に見られ、委託調査報告書でも何枚かの写真を載せているので2000年代初期迄は居たであろうが今回は見なかった。

オ．ヤブヤンマなど

うるおいの森沢止め池横の1m×2m弱の落葉が溜った防火貯水槽で多数のヤブヤンマ幼虫を発見した。1950年代には防火貯水槽は林内各所に設置され、当時から本種やタカネトンボの発生源となっていたが、公園整備に伴い撤去された様で現在はここ以外では見つからなかった。委託調査報告書では本種を居るはずのないルリボシヤンマとして写真とリストで誤同定している。同報告書でうるおいの森からリストされているミルンヤンマは、かかる同定レベルから判断すると青色をまだ発色していないヤブヤンマ未熟個体の誤同定の可能性が考えられる。このことを確認すべく東山総合公園事務局を訪れたが、調査者から標本を受領しておらず確認できなかった。ミルンヤンマ幼虫の棲息場所の可能性が無いとも言い切れない林間の流れとして、天白溪湿地の両側の流れを探索したが、餌となる水生節足動物等も見られずオニヤンマ幼虫だけが普通であった。さらにもう1か所沢止め池下方の流れも調べたが、ここは沢止め池から逸出したアメリカザリガニしか居なかった。いずれの細流も規模が小さく水量も少なく泥状底部の淀んだ部分もあり、ミルンヤンマ幼虫が棲息する中小礫底が連続する水量豊富で清冽な流れとはかけ離れた状態で、2000年代初期にはより良い状態の流れがあったのか、或いは偶発的な飛来があったのかも知れないが、現状では棲息可能性は否定された。又、当地域からかつて本種が記録されたこともない。ミルンヤンマは記録種としては扱わない。

(3) サナエトンボ科

本科は最も減少著しく在来種はウチワヤンマを動物園上池と山香町新池で確認しただけである。温暖化によると考えられる北進を続けるタイワンウチワヤンマも同じ二つの池で確認した。本種は市内各所で普通に見られる様になった。

(4) オニヤンマ科

オニヤンマは天白溪湿地の流れといのちの森換気塔東の流れの2か所に幼虫は多産する。成虫は藤巻町3丁目の林縁の細流を伴う路上と植物園星が丘門近くで確認した。

(5) エゾトンボ科・ヤマトンボ科

タカネトンボは少ない乍らヤブヤンマと同様以前の様に林中の防火貯水槽で幼虫を採集した。大きな池を好むオオヤマトンボは動物園上池で羽化殻と成虫を確認した。コヤマトンボを天白町八事山田の林縁の路上で1回目撃したがこれは飛来である。当地域内に発生可能な河川はない。

(6) トンボ科

ア．広く普通に産するのはコシアキトンボ、ウスバキトンボ、シオカラトンボ、オオシオカラトンボで、ショウジョウトンボは植物園ビオトープ池の優占種である。ハラビロトンボもビオトープ池、小ビオトープ池に多く見る。チョウトンボはビオトープ池、動物園上池、同胡蝶池に普通で天白溪下池や名大四谷通西区域の人工水場などでも見る。湿地を好むシオヤトンボは稀で、天白溪湿地で1♂を採集しただけで、これは飛来の可能性がある。

イ．コフキトンボは委託調査報告書に写真もあるが今回は見なかった。ヨツボシトンボは同報告書にも今回も記録はない。

ウ．ハッチョウトンボ

今迄に本誌やレッドデータブックなどに述べて来たところであるが、現在植物園奥池東斜面湿地で見られる本種は、多分1980年代の頃と思うが、この湿地造成時に幼虫と共に客土した出自不明（県庁時代の同僚がこの造成にボランティアとして携わり、幼虫を移植した事実は語ったが、支障があるのか或は幾許かの罪悪感からか取って来た先は何所か明かさなかった）の移入に拠るもので真の東山植物園産の子孫とは言えないので、この場所に従来から棲息していた個体群とは見做さず記録種としては扱わないことを再度明記する。動植物園の使命から勘案するに展示することは妥当であるが、ライオンやキリンの様にその出身地と由来を現地案内板に正しく表示し誤解を招かない様にすべきと考える。名古屋市公刊物にも誤って扱われている。立入り出来ない為精査不能のうるおいの森所在大坪湿地は双眼鏡による探査では開水面は認め難く草原状の現状から見て産する可能性は否



図23. タカネトンボ幼虫（左）とヤブヤンマ幼虫（右），防火貯水槽，2018.6.17採集



図24. ヤブヤンマ雄の羽化，2018.7.5撮影



図25. マルタンヤンマ羽化殻，ビオトープ池，2018.6.22撮影



図26. ネキトンボ雄，ビオトープ池，2018.9.11撮影



図27. ホソミオツネントンボ雄，小ビオトープ池，2019.4.5撮影



図28. オオアオイトンボ雄，ビオトープ池，2018.10.24撮影



図29. クロイトトンボ雄, ビオトープ池, 2019.5.17撮影



図30. オオヤマトンボ羽化殻, 上池, 2018.7.19撮影



図31. ウチワヤンマ雄, 上池, 2019.6.22撮影



図32. タイワンウチワヤンマ雄, 上池, 2019.8.1撮影



図33. シオヤトンボ雄, 天白溪湿地と称する所, 2019.5.8撮影



図34. 鉢のウチワゼニグサ葉裏のハッチョウトンボ羽化殻, 観察園, 2019.5.30撮影

定的である。

四谷通から西の名大構内最南西部に所在する名古屋大学博物館野外観察園内の鉢から現在も発生を繰り返している本種は、関係者の言によると半世紀程前に教養部が出来て圃場と池が設置された時点でメダカを飼っていた鉢に居たと言う。当時四谷通東地区の東北端の農学部辺りにあった湿地にも本種は居たとのことである。1950年代の名大構内東部やその周辺の丘陵地帯は林や耕作地、水系も豊富であり、実際にその頃この辺りで本種を採集している。名大キャンパス設置の変化を経ながらも大学であることから保全に留意がなされ、当時の子孫が現在迄残存するに至ったことは推測に難くない。現況を概観すると観察園はさして広くないが周囲に木立を有し、園内は温室、草本木本の栽培や丈の低い草地や裸地からなり、中央にコンクリート製の浅い小池、その周辺に本種が継続発生している直径数十cmの鉢が置かれている。この鉢にはオオバナイトタヌキモ、ウチワゼニグサ、ミツガシワ、ハンゲショウなどが生育し、この鉢で羽化殻1個を採集した。未熟雄は園内草地部分に拡散、成熟雄は池水面やその周囲に居り発生した鉢に戻っている個体もある。2019年5月30日には数頭を目撃したが、その後かなり増加したとのことである。恐らく大部分の個体は園の閉鎖空間から外出することなく、ここで生命を全うし継続発生を繰り返しているのであろう。

ベニイトトンボ発生源の人工池は澄明でスイレン等浮葉植物が植栽されている。本種も数十年来の当地産の子孫であろう。多数羽化した場合は移動分散も考えられる。

同日交尾1ペアを含む数頭を目撃した。いずれにしても東山総合公園域内には適する湿地消滅のためハッチョウトンボは残存せず、造成湿地の移入個体群は棲息とは認めないことから、今回調査範囲で記録されるのは観察園内の個体群だけである。

エ. アカネ類

1950年代13種が棲息していた本属は委託調査では一応7種とされ、今回調査では5種しか記録されなかった。植物園内ビオトープ池の優占種であるネキトンボは委託調査では記録されていない。大変目立つ本種は間違い様が無いので2010年代になって発生増加したのかも知れない。マユタテアカネは個体数は多くないものの幼虫棲息環境の幅が広いので広く分布する。これに対してヒメアカネは調査期間を通じ飛来と思われる1♀を採集したのみで本格的湿地が調査区域に存在しないことを示唆する。リスアカネは暗い水溜りが散在するうるおいの森沢止め池の谷筋でよく見かけ、植物園ビオトープ池でも散見する。近年やや回復傾向にあるやに見受けられるアキアカネはビオトープ池とその周辺に普通で同池で産卵の可能性もある。動物園、テニスコート、名大構内でも散見する。一方、ナツアカネは皆無で、ノシメトンボ、コノシメトンボも全く見られなかった。総じてアカネ類は貧弱である。

(7) 掲載写真は普通種が多いが、その棲息場所に於ける優占種、指標的な種、稀な種など意味のある種を示したものである。(図23～36)

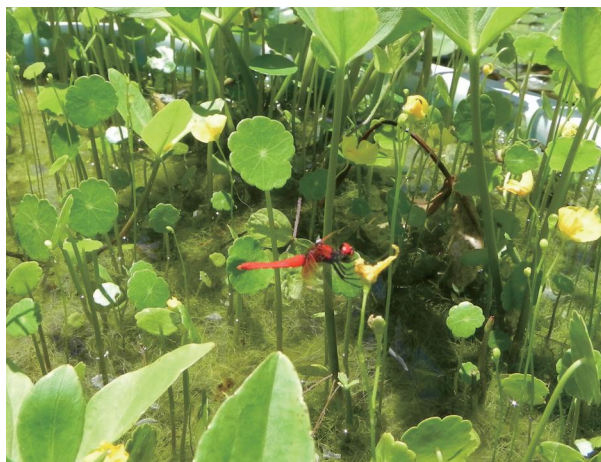


図35. 幼虫期を過ごした鉢に戻っているハッチョウトンボ成熟雄、同、同



図36. 人工池で交尾するベニイトトンボ、観察園、2019.5.30撮影

3. トンボ相衰退の状況

今回調査の全記録種は31種である。1940年代後半から1950年代にかけて63種、1970年代に1種が加わり当地域の既知種は64種である。

2007年と2008年の市委託調査報告書では、誤同定なども含み内容にいささか疑義はあるものの一応35種が記録されたことになっており、その後の10年間でも若干の減少が続いていると言うことになる。

約70年前に対する現在の残存率は、今回記録種31種から新規参入のタイワンウチワヤンマ1種を引いた30種が残存種となり、64種対30種は47%約半分弱である。

衰退の主因は都市開発拡張による棲息場所の著しい消

滅である。例えば植物園東端崖下の旧愛知郡猪高村耕地、現名東区植園町やにじが丘に所在した複数のため池のベッコウトンボである。本種は崖上にも分散し植物園内でも見られた個体もここに由来したのであろう。同所からはフタスジサナエ、オグマサナエ、ヨツボシトンボなども発生した。当時はヨツボシトンボは珍しかった。本種は近年分布拡大傾向にあるが委託調査リストでも今回調査でも見ない。植物園正門交差点の橋をくぐり南下したところにあるゴルフ練習場と駐車場は、池周囲に小池や湿地を伴う広大な桜池があった所で、コバネアオイトンボ、ハッチョウトンボ、カスミサンショウウオなどが多く、ネアカヨシヤンマも採集できた。ここなどは当時

表1 記録場所一覧

リスト略記	詳しい場所表記
1. 動植物園（ふれあいの森）	
植物園ビオトープ池	名古屋市千種区天白町植田 植物園
植物園小ビオトープ池	名古屋市千種区天白町植田 植物園
植物園奥池東斜面湿地	名古屋市千種区天白町植田 植物園
植物園四季のせせらぎ	名古屋市千種区天白町植田 植物園
植物園奥池	名古屋市千種区田代町 植物園
動物園上池	名古屋市千種区田代町 動物園本園
動物園胡蝶池	名古屋市千種区田代町 動物園本園
動物園メダカ館前	名古屋市千種区田代町 動物園北園
2. 公園区域外	
植園公園	名古屋市名東区植園町三丁目
3. いのちの森	
いのちの森 山香町新池	名古屋市名東区山香町
いのちの森 山香町東山公園	名古屋市名東区山香町東山公園大久手広場
いのちの森 換気塔東細流	名古屋市千種区天白町植田 名古屋高速緑橋換気所
いのちの森 藤巻町3	名古屋市名東区藤巻町三丁目
4. うるおいの森	
うるおいの森 八事裏山	名古屋市天白区天白町八事裏山
うるおいの森 テニス場	名古屋市天白区天白町八事裏山テニスセンター
うるおいの森 天白溪湿地（付近）	名古屋市天白区天白町八事裏山
うるおいの森 沢止め池（付近）	名古屋市天白区天白町八事裏山
うるおいの森 八事山田	名古屋市天白区天白町八事山田
うるおいの森 下池（公園）	名古屋市天白区天白町八事山田天白溪下池公園
5. 名古屋大学	
農学部圃場	名古屋市千種区東山元町 名古屋大学農学部圃場
農学部前貯水池	名古屋市千種区東山元町 名古屋大学構内
名大博覧公園	名古屋市千種区宮東町 名古屋大学博物館野外観察園

の行政としては考えが及ばず民間主導となったのであろうが、公園自然環境としては非常に優れた最も残すべき場所であったのだ。現在の名古屋大学敷地東部周辺の東山元町一帯にあった耕地、林、湿地や、うるおいの森南東端の谷間の「本当の天白溪湿地」は住宅地やグラウンド、人工公園などに変貌した。

さらに今回調査地域に接し、南東方面に広く存在した愛知郡猪高村、天白村の耕作地帯の水田、側溝、池沼や植田川本流、支流などから攝食、成熟の場として動植物園やその周囲の森に飛来したであろうサナエトンボ類を始めとした各種トンボも、それらの地域の名東区、天白区への編入都市化に見られる如く発生場所を失った。サナエトンボ類の衰退は最も目立ち1950年代は9種見られたものが残存するのは1種だけとなった。瀬戸、豊田、長久手、日進の今も程々の自然が残る東部丘陵方面と東山地域間は殆ど市街化しコリドーが無くなり棲息地間の距離が延びこれらの地域との昆虫交流即ち供給が低下したことも衰退の一因と考えられる。

現在の東山地域内の水系の劣化も一因である。うるおいの森天白町八事裏山の天白溪湿地と称する場所は土砂の流入でつぶれたが1970年代は湧水湿地が存在したと聞く。この場所でいつも見るのは1、2頭のオオシオカラトンボだけで開水面に乏しく産卵困難であること、水はゆっくりだが流下し完全な止水でないことなどから現状では湿地性トンボの発生源とは認めがたい。同じく沢止め池も清澄な水の供給のある安定した池であるにも拘わらず、アメリカザリガニによるものか原因は定かではないが、他の水生生物や水草を見ない状態になってしまっている。植物園内でも奥池など点在する池の汀の人工化によりイトトンボを始めとするトンボの衰退を招いた。

1950年代に存在したアカマツも優占種とする落葉広葉樹林が遷移により殆どの場所が常緑樹優勢になっているのではないかと見られることも間接的にトンボに何らかの影響を与えているかもしれない。

4. 目録

今回2018年・2019年で確認し得た種は31種である。記録者はハグロトンボ（吉野奈津子）以外全て高崎である。目撃記録や撮影で代用した記録の精度は採集と同等である。リストの記録場所は略記であるが、対応する詳

しい場所表記は表1の通りである。リストは全ての記録を掲げたものではない。

アオイトトンボ科 Lestidae

ホソミオツネイトンボ *Indolestes peregrinus* (Ris) 植物園小ビオトープ池, 5-IV-2019, 1♂

オオアオイトトンボ *Lestes temporalis* Selys 植物園小ビオトープ池, 12-X-2018, 2♂1♀; 植物園ビオトープ池, 24-X-2018, 2♂; うるおいの森八事裏山, 9-X-2018, 1♀; 農学部圃場, 19-X-2018, 2♂

カワトンボ科 Calopterygidae

ハグロトンボ *Atrocalopteryx atrata* (Selys) 名大博観察園, 10-VII-2019, 1♂撮影, (吉野奈津子)

イトトンボ科 Coenagrionidae

キイトトンボ *Ceriagrion melanurum* (Selys) 植物園ビオトープ池, 11-IX-2018, 1♂目撃; 動物園メダカ館前, 19-VII-2018, 1♂

ベニイトトンボ *C. nipponicum* (A. sahina) 名大博観察園, 30-V-2019, 複数撮影

クロイトトンボ *Paracercion calamorum* (Ris) 植物園ビオトープ池, 22-VI-2018, 4♂1♀; 動物園上池, 20-VI-2019, 1♂撮影; うるおいの森八事裏山, 11-V-2019, 1♂; 名大博観察園, 30-V-2019, 1ペア撮影

アジアイトトンボ *Ischnura asiatica* Brauer 植物園四季のせせらぎ, 19-IX-2018, 2♀

ヤンマ科 Aeshnidae

マルタンヤンマ *Anaciaeschna martini* (Selys) 植物園ビオトープ池, 22-VI-2018, 2羽化殻

ヤブヤンマ *Polycanthagyna melanictera* (Selys) うるおいの森沢止め池付近貯水槽, 17-VI-2018, 7幼虫; 同, 23-V-2019, 1幼虫

ギンヤンマ *Anax parthenope* (Selys) 植物園ビオトープ池, 22-VI-2018, 1羽化殻; 動物園胡蝶池, 10-VII-2018, 多数目撃; いのちの森山香町新池, 13-IX-2018, 1♂目撃; 植園公園, 24-VII-2019, 1♂目撃

クロスジギンヤンマ *A. nigrofasciatus* Oguma 植物園小ビオトープ池, 17-V-2019, 1♂・1羽化殻;

植物園ビオトープ池, 17- V -2019, 2羽化殻

サナエトンボ科 Gomphidae

ウチワヤンマ *Sinictinogomphus clavatus* (Fabricius)

動物園上池, 22- V -2019, 1♂撮影; いのちの

森山香町新池, 24- VII -2019, 1♂撮影

タイワンウチワヤンマ *Ictinogomphus pertinax* (Selys)

動物園上池, 19- VII -2018, 1♂; 同, 1- VIII

-2019, 1♂撮影; いのちの森山香町新池, 13-

IX -2018, 1♂撮影

オニヤンマ科 Cordulegastridae

オニヤンマ *Anotogaster sieboldii* (Selys) いのちの森

換気塔東細流, 25- VI -2018, 4幼虫; うるおい

の森天白溪湿地, 23- V -2019, 6幼虫; いのち

の森藤巻町3, 24- VII -2019, 1♂; 植物園星が丘

門付近, 1- VIII -2019, 1♂目撃

エゾトンボ科 Corduliidae

タカネトンボ *Somatochlora uchidai* Förster うるおい

の森沢止め池付近貯水槽, 17- VI -2018, 1幼虫

ヤマトンボ科 Macromiidae

オオヤマトンボ *Epophthalmia elegans* (Brauer) 動

物園上池, 19- VII -2018, 3羽化殻; 同, 1- VIII

-2019, 1羽化殻撮影

コヤマトンボ *Macromia amphigena* Selys うるおいの

森八事山田, 11- V -2019, 1♂目撃

トンボ科 Libellulidae

チョウトンボ *Rhyothemis fuliginosa* Selys 植物園ビ

オトープ池, 1- VIII -2019, 2頭目撃; 動物園上

池, 10- VII -2018, 複数目撃; 動物園胡蝶池, 10-

VII -2018, 複数目撃; うるおいの森下池, 25- VII

-2019, 1頭目撃

リスアカネ *Sympetrum risi* Bartenev 植物園ビオト

ープ池, 12- X -2018, 1♂; うるおいの森沢止め池,

18- IX -2018, 2♂

アキアカネ *S.frequens* (Selys) 植物園ビオトープ池,

12- X -2018, 3♂; 動物園上池, 18- X -2018,

複数目撃と撮影, うるおいの森テニス場, 9-

X -2018, 2頭目撃; 農学部前貯水池, 19- X

-2018, 2頭目撃と撮影

ヒメアカネ *S.parvulum* (Bartenev) うるおいの森天白

溪湿地付近, 18- IX -2018, 1♀

マユタテアカネ *S.eroticum* (Selys) 植物園ビオトープ

池, 12- X -2018, 1♂, 植物園奥池東斜面湿地,

11- IX -2018, 1♂; うるおいの森天白溪湿地,

18- IX -2018, 1♂; うるおいの森沢止め池, 9-

X -2018, 2♂; うるおいの森下池公園, 19- X

-2018, 1♂; 農学部圃場, 19- X -2018, 2♂;

植園公園, 13- IX -2018, 1♀目撃

ネキトンボ *S.speciosum* Oguma 植物園ビオトープ池,

22- VI -2018, 5羽化殻; 同, 20- VI -2019, 2羽化

殻

コシアキトンボ *Pseudothemis zonata* (Burmeister) 動

物園上池, 19- VII -2018, 2羽化殻; 植園公園,

24- VII -2019, 複数目撃

ハッチョウトンボ *Nannophya pygmaea* Rambur 名大

博観察園, 30- V -2019, 1羽化殻と複数撮影

ショウジョウトンボ *Crocothemis servilia* (Drury) 植

物園ビオトープ池, 22- VI -2018, 1♂・2羽化殻;

動物園上池, 19- VII -2018, 複数目撃; 農学部圃

場, 26- VII -2018, 1♀撮影

ウスバキトンボ *Pantala flavescens* (Fabricius) いのち

の森山香町東山公園, 18- X -2018, 1♂; 農学

部圃場, 1- VIII -2019, 多数目撃

ハラビロトンボ *Lyriothemis pachygastra* (Selys) 植物

園ビオトープ池, 22- VI -2018, 1♂; 農学部圃場,

30- V -2019, 1♂目撃, 植物園小ビオトープ池,

25- VI -2019, 1♂撮影

シオカラトンボ *Orthetrum albistylum* (Selys) 農学部

圃場, 26- VII -2018, 1♀; うるおいの森下池,

11- V -2019, 1♂目撃

シオヤトンボ *O.japonicum* (Uhler) うるおいの森天白

溪湿地, 8- V -2019, 1♂

オオシオカラトンボ *O.melania* (Selys) 植物園ビオ

トープ池, 22- VI -2018, 1♂; うるおいの森沢

止め池付近, 25- VI -2018, 1♂; うるおいの森

天白溪湿地, 23- V -2019, 1♂

5. 終りに当たり

短期間ではあるが現時点の東山地域のトンボ棲息状況

を調査し, 往年に比しかなり劣っていることが判った。

主要因は避け難い著しい都市化による調査地域の周辺地

帯も含む棲息場所の喪失で、その他地域内水域の劣化なども考えられる。

現在広小路線以南の東山総合公園区域の丘陵地にあつては、かなりの部分が常緑樹を主とした林に恵まれている。その林内ギャップや林縁に林の保水力を生かし池畔に湿地状部も伴う様な自然的な水域の創出を図るなどすれば、主として止水性水生生物の勢力回復が期待できるのではなからうか。緑橋換気塔東の水溜りは工夫すれば良いハビタット化可能と思われる環境である。

東山スカイタワーから四方を見廻すと東山総合公園区域は林に覆われ一見生物多様性が保たれている様に見受けられるが、分類群毎にその棲息場所や棲息状況を精査し過去のデータと比較してみるならば、必ずしもそうではないらしいことを認識するであろう。

精密な生物多様性の把握は市井の各分類群研究者の個人的、日常的、継続的地道な調査活動に負うところ大である。レッドリストやグリーンデータブック作成もこれ無くしては達成できない。科学的根拠に立脚しない安易な節足動物等の採集制限や、一律的な立入規制或は行政の集团的行事とか大学の行為でなければ調査活動を認めないとするが如き風潮は、自由であるべき、そして最も実効あるその活動を阻害する。一考あって然るべきと思考する。

謝辞

市委託調査報告書の閲覧に御配意頂いた滝川正子さんと井上昌次氏、1970年代の情報を提供して下さいった清水典之氏、名古屋大学博物館野外観察園調査に便宜を計って下さった同大吉野奈津子技官、東山総合公園地域に関して教示下さった当時同園事務局に在籍し現在緑政土木局都市農業課勤務の倉田三恵子さん、植物の同定を煩わした飯尾俊介氏に深甚の謝意を表する次第である。

引用文献

- 株式会社ブレック研究所. 2008. 東山公園及び平和公園環境調査業務委託報告書. 株式会社ブレック研究所, 名古屋.
- 松沢孝晋. 2016. 名古屋市名城公園・名古屋大学・呼続公園の水環境とトンボ. *Aeschna*, (53): 19-26.
- 高崎保郎. 1952. 名古屋市東山産のトンボ. 中部日本自然科学教室会報, (5)8-10.
- 高崎保郎. 2015. 愛知県名古屋市東山公園（動植物園）周辺～都市化による棲息地の消滅～. 失われゆく日本のトンボ生息地, 日本トンボ学会, 東京, 65pp.
- 高崎保郎. 2015. 60年前の名古屋市東山と名古屋城の蜻蛉追憶. なごやの生物多様性, 2: 37-52.
- 高崎保郎. 2018. 名古屋の蜻蛉目総括, 昔と今. なごやの生物多様性, 5: 93-111.